

◇拠点形成概要

機 関 名	東京外国語大学
拠点のプログラム名称	コーパスに基づく言語学教育研究拠点
中核となる専攻等名	大学院総合国際学研究所言語文化専攻（地域文化研究科地域文化専攻 平成21年4月1日改組）
事業推進担当者	（拠点リーダー） 峰岸 真琴 教授 外 14 名

〔拠点形成の目的〕

本拠点形成計画の目的は、言語学・言語情報学の若手研究者に、フィールド言語学とコーパス言語学、ならびに言語教育学の実習という三つの実践トレーニングの機会を提供することで、言語文化の多様性に通じた、複眼的視野を持つ言語研究者・言語教育者を育成することである。

上記の目的を実現するために、本プログラムでは以下の三つの教育研究プログラムを提供する。

- (1) フィールド言語学：世界の主要言語だけでなく、少数民族の言語および文化を臨地研究するための方法論（調音音声学、記述言語学、フィールド調査法など）を習得させる。
- (2) コーパス言語学：様々な言語情報（現地の録音資料や文献、テキスト）を収集するための方法を学び、研究目的に応じてコーパス化し、それを言語分析する手法を習得させる。
- (3) 言語情報学：自然会話や第二言語教育の教育実践の場から得られる言語運用データのコーパス分析の成果を言語教育に応用し、言語運用に基づく言語教育学の方法と実践を習得させる。

〔拠点形成計画及び進捗状況の概要〕

本拠点の教育研究プログラムは、上記三つの研究アプローチに対応した、以下の三つの教育研究プログラムを企画し、二年度にわたって推進してきた。

具体的には、教育・人材育成面において、上記三分野の教育プログラムを充実させ、複数分野の専門家の指導による合同ゼミナールを実質化し、三分野に関するリレー講義を開催し、言語文化の多様性を学び、複眼的視野を体得するための合同指導体制を強化した。

フィールド言語学の分野においては、ロンドン大学アジア・アフリカ研究院（SOAS）の先端研究者を招聘し、平成20年2月にDocumentary Linguistics Workshopを開催して言語ドキュメンテーションおよびコーパス構築に関する国際ワークショップを開催した。ワークショップには本学の博士後期課程の院生だけでなく、他大学からも多数の若手研究者が参加した。参考 <http://cblle.tufs.ac.jp/index.php?id=56>。

コーパス言語学および言語情報学の分野においては、世界の第一線で活躍する研究者をフランス、カナダ、ドイツ、トルコ等から招聘し、平成20年5月に国際シンポジウムCorpus And Variation In Linguistic Description And Language Education を開催した。2日間で延べ200名の参加者があり、会議報告集はオランダの言語学専門書店であるJohn Benjamins 社からCorpus Analysis and Variation in Linguistics（平成21年4月）として出版された。

次世代研究者育成のために、平成20年度、拠点では国内の若手研究者を公募によりリサーチ・フェロー11名、本学博士後期課程学生のジュニア・フェロー27名を採用した。また教員の指導による自主研究プロジェクトを採択して、海外に教員と院生を派遣し、英語、ロシア語、スワヒリ語、トルコ語などの自然会話や、英語、日本語などの教育現場での学習者言語データを収集させた。また、若手研究者を国内外での研究発表に派遣することで、国際的な研究実践・発表の機会を提供した。ジュニア・フェローのうち、特に博士論文執筆の最終段階にある者を公募し、経済的な支援も実施した。

国内の若手研究者を公募によって、平成19年度からグローバルCOE研究員3名を雇用し、国内外での三研究分野のフィールド調査に派遣し、コーパス言語学的研究に従事させている。また、国内外の先端教育研究者をグローバルCOEプログラム特任教授として雇用し、共同研究を実施している他、雇用した研究員および大学院生らの論文発表指導、合同ゼミナールの実施および国際的研究教育体制の構築に従事させている。

コーパス言語学班では、タイ語およびロシア語の電子辞書を開発し、平成20年度よりweb上で公開している。これらの辞書は、語学教育上の利用に留まらず、品詞情報を始めとする文法情報などを充実させることで、テキスト分析研究用の機械可読辞書へとさらに発展させる予定である。

言語情報学班では、21世紀COEの成果であるweb教材をオープンソースのe-learningシステムであるmoodleに移植した。またフランス語とスペイン語の話し言葉コーパスの品詞検索ページを作成し、いずれも平成20年度より順次公開している。

平成19・20年度における拠点計画と進捗状況を客観的に評価するために、オランダのライデン大学、ロンドン大学、シンガポール国立大学の研究者に評価を依頼し、計画の実現性、学術的価値、若手育成等、様々な観点から外部評価が行われ、評価結果はweb上に公開されている。参考 <http://cblle.tufs.ac.jp/index.php?id=2>。

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、大学全体の構想の中に本プログラムが位置付けられ、支援体制も比較的整えられていると評価できる。

拠点形成全体については、運営マネジメントが順調に機能し、国際競争力のある大学作りに積極的に取り組んでいると評価できる。また、国際シンポジウムなどの研究成果が、シリーズとして国外で公刊される形になったことは、評価できる。

人材育成面については、研究指導、経済的援助、キャリア・パスにおいて適切な措置が取られていると評価できるが、本プログラムの重要なポイントである3分野にまたがる教育プログラムについては、十分な機能を果たすよう、更に工夫・改善をして推進することが望まれる。

研究活動面については、国際的な研究活動が広範囲の地域との連携で進められており、また、電子辞書、学習者言語コーパス等デジタルレベルでの成果についても、十分評価できる。しかしながら、個別のフィールドとそれぞれのコーパスを超えた研究者の協力・連携が、実質的にどのように機能しているのか、また、新たな学術的知見が生まれているのかなどについては、更に明確になるよう、一層の努力を傾けることが必要である。

留意事項への対応については、新たな教育プログラムの開設によって対応に努めているが、異なる分野の融合という点では、更なる工夫が望まれる。

今後の展望については、フィールドワークなどを通じて構築されるコーパスが、言語学、言語教育学の研究・教育の発展と、社会貢献に資することが期待できることから、本事業終了後における大学全体での継続的支援が大いに望まれる。また、国際的な拠点としての吸引力を高める工夫と努力を更に継続する必要がある。